獣医師と薬剤師に認識差

獣医療専門教育の充実を

昭和薬大 神林氏ら

国内外の獣医療における獣医師と薬剤師の連携を分析した昭和薬科大学臨床薬学教育研究センター実践薬学部門の神林弾講師らの研究で、薬剤師に期待する役割をめぐり獣医師と薬剤師の間に認識の隔たりがあり、相互理解の不足が世界共通の課題となっていることが分かった。一方、薬剤師の役割として最も多く報告されたのは「ペット（動物患者）に対する院内製剤の調製および調剤」で、全体の62・5％を占めた。

研究成果は7月31日付で国際学術誌「PLOS ONE」に掲載された。神林氏は「動物生理学に関する薬剤師の知識不足への懸念が獣医師との連携を進める上で障壁となっている。薬剤師向け獣医教育の充実が職種間のギャップ解消につながる」とした上で、「互いの職種や仕事内容を理解し、信頼関係を構築していくことが重要」と訴える。

獣医師と薬剤師の連携に関する既存文献を整理し、獣医療分野における薬剤師の役割や実践例、両職種の認識を明らかにすることを目的に実施した。研究では関連文献を検索し、2007～24年に公表された16件を解析対象とした。国別では米国が7件と最も多く、日本とニュージーランドがそれぞれ3件だった。

薬剤師の役割として最も頻繁に報告されたのは「動物患者に対する院内製剤の調製および調剤」（62・5％）で、「医薬品情報（DI）の提供および相談」（37・5％）、「在庫・供給管理」（25・0％）、「飼い主への服薬指導」（18・8％）、「安全性および曝露管理」（12・5％）が続いた。

地域差も見られ、米国では製剤調製サービスへの関与が中心だったのに対し、アジアや南米では在庫・供給管理や院内の安全性確保への関与が目立った。

一方、獣医療における薬剤師の貢献を一定程度評価する声がある半面、獣医師側には薬剤師の専門性に対する懸念も根強かった。マレーシアや米国の調査では、獣医師は在庫・供給管理や医薬品情報提供への支援を評価していたものの、動物種ごとの毒性や代謝の違いに伴うリスクを理由に、薬剤師による臨床的助言を受け入れることには慎重な姿勢を示していた。

日本の研究でも、薬剤師は動物医療への直接的な貢献に意欲を示していたが、獣医師は在庫管理や医薬品情報の提供をより重視しており、期待する役割にギャップがあることが確認された。

神林氏は、「獣医師と薬剤師の双方がお互いの業務範囲や専門スキルについて十分に理解できていない実態が示された」と考察した。今回の研究を踏まえ、国内でも両職種の意識差や連携実態、相互に期待する役割を明らかにする観察研究を計画している。

さらに、薬剤師を外部のサービス提供者から獣医療チームの一員へ発展させるためには、獣医特有の生理学や薬理学などに関する専門教育の充実が不可欠と指摘。大学においても獣医学部と薬学部などが参加した多職種連携教育（IPE）を例に、早期段階からの対話を通じて協力する文化を醸成していく必要性にも言及した。

同時に薬剤師の関与によるエビデンス構築も今後の発展に欠かせないとした。現状では薬剤師が常駐する動物病院は限られることから、小動物病院と保険薬局の連携体制構築を足がかりに、標準化された動物用調剤ガイドラインの確立につなげる必要性を提言した。